

オレあ高校生のデンジ

クソブロ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

最強のアイデアが降ってきたので書きました

タイトルにある通りデンジくんが普通の高校生だったら？みたいなお話です

目次

番外編

クリスマス デイ | 1

第1章

1 話 デンジくんは今日も頑張る

8

2 話 まあ普通の1日じゃあねえつす

か? | 13

3 話 とチエ | 23

4 話 いきなりんなことある?

32

5 話 非常識なヤツ〜!! | 39

6 話 印象最悪の邂逅 | 46

番外編

クリスマス マス デイ

「おう、孤独の悪魔だかなんだか知らねえけどよお、ずいぶんと楽な悪魔だったな。ただぶっ殺しやあいだけだからよ」

「ワシらは一人じゃないからな！そこんところを理解できなかったのが運のツキじゃったのお」

「実際、一人だけで戦つてるとどうしようもない相手だったな…この悪魔に俺たちがあてがわれたのはよかった、と言うべきか。最悪お前らは何度でも生き返れるからな」

「……ん、今日はこのまま上がっていいそうだ」

「マジ?」「マジか?」

「マジだ。帰るついでにチキンとケーキ買ってくぞ」

「チキン!? ケーキ!? えっあつ、い、いいんですかア!?」

「な、なんじゃあ…? ついに働かすぎで頭がイカれたのか?」

「季節の行事くらい確認してろ。今日はクリスマスだからな…ちよつとはそれらしくす

るだけだ」

「あ、もうそんな時期か。なんだかんだ忙しくて忘れちまってたな……」
「なら早く行くぞ！ ニヤーコにも何か食べるよう買ってやらんとな！」

「あゝヤベエ！ チキンの匂いが車ん中で充満してヤベエ！」

「拷問じや、ワシらは拷問を受けておる！ 早く食いたいんじやが！」

「家までダメだ。お前ら絶対車の中にポロポロ落とすだろ。出してもらってる車を汚すなよ」

「くうう……空腹で殺される……これはアレじや、飢餓の悪魔の攻撃じや……」

「ンなもんいねえよ。にしても早く食いてえつてのは確かだけどなあ」

「あと10分もないから少し黙ってる」

「早く！ 早く食うぞ！」

「待たされた分、それはもうめちやくちやに食ろうてくれるわ！」

「待て。デンジ、先にケーキ切り分けるの手伝ってくれ」

「うええ……あゝ……けどチキン……」

「悩んでる間に全部パワーに食われるぞ」

「流石に食わんが？」

「まゝすぐ終わらせりやあいだけだろ？抑えてるからパツとやってくれ」

「悪いな、両手があればこんなこと頼まなくても済んでたんだが」

「いつも思ってたねえクセにんなこと言うなよな、それに大丈夫だぜ、別に。どうせ後でやるつもりだったからな」

「…そりや、気がきくな」「ニャーコ、肉じゃぞ肉。よく食べるんじやぞ」

「…：…おゝし、こんなモンだろ！早くチキンもケーキも食うぜ食う！」

「そういえば、お前らはサンタに何か頼まないのか？」

「あ？」「サンタ？」

「そう、サンタ」

「あゝ…じゃあ俺は「ワシはアレがいいのうアレ！日曜日に見てるアニメの変身するやつー」」

「そんなんでいいのか…？まあ好き好きだしな…んで、お前は」

「んゝ…まあ…俺は…いいかなあ」

「あゝん？せつかくタダで何かもらえるんじやぞ？なんでも言ってみればいいではないか」

「思いつかねえモンは仕方ねえからな、別にいいんだよ」

「そうか……あつ！ テメエパワー、ケーキを手づかみで食うんじゃねえ！ フォーク使え
フォーク！」

「ふおんなふおのひふあん！」

「どうせその手で汚しまくるんだからやめろ！ 早く手拭いて持ち替えろ」

「イヤふあ！」

「……いい子にしてねえとサンタはプレゼント持つてこねえぞ」

「ワシはいい子です……でした、ので、しっかりフォークを使ってケーキを食べます」

「よし。デンジも好きに食えよ」

「おう……んぐ、やっぱうめえなあ、ケーキ!!」

「……なんだ、まだ起きてたのか」

「おくアキ。いやあ、なんか寝付けなくなつてな」

「そういえば、本当にいいのか」

「何が？」

「プレゼント」

「あ……まあな。特に思い浮かぶもんもねえし……それに……」

「なんだ」

「サンタなんていねえだろ？ 実際のところ」

「なんでまたそう思ったんだ？」

「前も少し話したよな、俺がヤクザンとこでデビルハンターやってたこと」

「ああ」

「そんな時は俺とポチタだけで物置きみてえな家に住んでたんだ。サンタは子供の所に来るゝつつうから、あの時も…その次とその次も待ってたんだ」

「けど、来なかった、か？」

「ああ。もしかしたらこんな汚ねえ場所に住んでるからサンタさんも気づかねえのかな…って思ってたけど、何年も来なかったらそりやあうつすらと気づくもんだ」

「案外、その気づかなかったって方かも知れねえぞ」

「……んまあ……だとしても？ もういいんだよ」

「いい…、つてのは？」

「……俺さあ、クリスマス時は…小麦粉に水と砂糖混ぜて食ってたんだよ。それがケーキだと思つてさ、食つたこともねえからこんな感じかなあつて」

「……」

「なのに今はチキンも食えて、本当のケーキも食えてる。うまかつた…：すげえうまかつた、たぶんあの“ケーキ”はケーキとして二度と食えねえと思う」

「本物を知っちゃまったからか」

「ああ。…あのケーキ、確か三、四千円くらいだかしたろ？俺の知ってる”ケーキ”だったら、たぶん二、三十個は食べちゃう値段だ。だから俺はもう、これ以上ないくらいの幸せもらってっからよお、別にいいんだよ」

「…そうか」

「それにお前らがいるしな。こないだ読んだ漫画のヒーローじゃねえけど、それだけでも満足だよ」

「わかった。…俺は先に寝るから、お前も遅くなりすぎるなよ」

「あゝ」

(…あれ、サンタはいねえ、いねえから親とかがプレゼントを置いていくんだろ？)
(アキはもう寝る…じゃあ、パワーにプレゼントを渡すのって”誰”なんだ？)

「…まさかな。俺も寝よつと…」

「…ンジ、デンジ！起きろ！起きろ！」

「…んあ…でつ、痛でつ！……んだよパワー、漏らしでもしたか……？」

「んなわけあるかアホめ！くだらないこと言っでないでこれを見ろ！」

「……んあ？あれそれ…『鬼殺しの剣』の変身剣じゃん」

「おう！寝てたワシの頭の上に置いてあったんじゃ！サンタは最高じゃな」

「…よかったな」

（んまあ、俺んところには何もねえだろうけど）

「ホレデンジ、ウヌの分じゃ」

「え？」

「……うおお！マジじゃんマジじゃん！DX変身剣だ！しかも俺が好きなキャラのやつもー」

「やっぱサンタはすごいおう！」

「ああ！すげえ！」

「サンタ最高！サンタ最強！」

「お前ら、朝からうるせえぞ」

「おうアキ、サンタはすごいぞ！ワシらんとこにいつの間にかプレゼントがあったんじゃー」

「ああ、すげえなサンタ！変な人形じゃなくてよかったぜ」

「……ああ、よかったな」

第1章

1話 デンジくんは今日も頑張る

「んあああアツ!?!」

体が浮き上がるような感覚と一緒に飛び起きた。

大量の汗を吸った肌着、ベッドシーツはぐしよぐしよで最高に気持ち悪い。汗をかいてるってことは暑いはずなのに、これだけ汗をかいてるなら相当。それなのにすごく寒く感じる。

…息を整え、シーツの慣れてない部分で体を拭く。朝日が窓から覗いているのを見るに、すでに朝になっているようだ。

「糞…マジで、クソだ…」

最悪の夢を見た。普段見るものとは違って、相当タチの悪い夢を長い間。

重だるい頭と体を無理やり動かしながら、着替え、メシ、歯磨き、登校準備をする。

そして誰もいない家に向かって、

「行つてきまーっす」

ドアは重く、ゆっくりと耳障りな音を立てて閉じた。
今日もなんでもない1日が始まる。

今朝見た悪夢がずっと尾を引いている。

仕方ないって言やあ仕方ないかもしれない…なにせ奇天烈で、ぶっ飛んで、馬鹿
「…………ジ」みたいに糞ついた夢だったから。

その夢ん中では『悪魔』がいて、それを狩る『デビルハンター』なる職業があつて、俺は『体
から電ノコ生やした悪魔人間』で『デビルハンター』をやっていたら良かった。

そこで俺は悪魔『…いい、…ン…』を狩ったり、たまにひでえこともあるが夢みてえな
生活したりしていた。

それだけならまだいい、いつか見た漫画やアニメが俺のイメージと結びついて『デ:
ジ!』夢になっただけなんだから。

けど…あれはそうじゃあない。

あのどうしようもない”嫌”なシーンは——

「おいゲンジ!聞いておるのか!」

「あ痛づつ!?!」

後頭部をえらく硬えもんで殴られる。下手すりゃ大怪我しても間違いなさそうな

硬さと強さで俺の頭は破壊されようとしていた。

こんなことすんのは、俺の知ってるやつには1人しかない。

「つ：おいパワ子、バカ痛えじゃねえかテメ〜！」

「仕方ないじゃろ？ デンジがワシの挨拶を聞かなかつたのが悪い。むしろこのワシに殴られたことを光榮に思うんじゃない！」

「ふざけやがつてよお、どこの世界に人間の頭をんなでけえ石で殴るやつがいるつてんだ!？」

「ワシか？ ワシじゃな」

この頭のイカれた行動とネジのはずれた言動をするのは早瀬はやせ 力子りきこ——力子、という名前からあだ名をパワー、パワ子と呼ばれている。

いっただか調べたが、力子というのは強くたくましく育ててほしいという意味でつけるような名前らしい。

確かにこいつは強く育った、もつともこんなトンチキな方向になんてきつと神様ですら想像してなかったろうが。

割れるような痛みだった頭もちよーつと我慢すればすぐ引いてくる。この体質ってほどじゃないけど、回復の速さにやあ（こいつと付き合う上で）めちやくちやに助かっている。この体でなきやあ一体何回こいつに殺されたかわからない。

「あれ…：そういうや今日は収録休みかよ？」

「おう、しばらくはライブもないからのお。嬉しいじゃろ？」

「いや、全く」

こいつは壊滅的な性格と頭をしているが、顔がムチャクチャにいいせいでアイドルとして活動している。しかもバカ売れで頻繁にテレビで見るようなやつだ。

こんな奴がどうしてそんなに売れてるのか？俺にはわからない。きっと世間は頭がイカれてるんだらう。

そしてライブもない、収録もないってことは、今から俺がこいつのお守りをしなきゃならねえってことに繋がってくる。考えるだけで息が漏れてくる。

「なんじゃなんじゃ、朝っぱらから元気がないのお」

「まあな…：糞みてえな夢見て糞みてえな目覚めだからよお、あまり気分はよろしくねえな」

「ふうん」

「体からチエーンソーが飛び出て、そのチエーンソーで悪魔を切り殺すつつう夢だったんだけど…：体切れて痛え感触もあって本当やだったな」

「そうかそうか、ワシは知らんが！」

このクソ女が顔と同じくらい良い性格になってくれたらなんていつも思う。ツラは

本当にいいのになあ…

そうしてとぼとぼ歩き続けて、校門をくぐり、靴を履き替え階段を登る。パワーとは別教室なのでここまでだ（どうせ休み時間に来るけど）

普段通りのなんてことない動作を何も考えずに繰り返して、今日が始まる。

「さてと、今日もデンジくんは頑張りますかあ！」

2話 まあ普通の1日じゃあねえっすか？

始業のチャイムが鳴る。

教室には教卓が、それとたくさんのイスと机。壁には通信だつたり、予定表だつたりとが貼られまくっている。

これが『普通』。悪魔なんてメルヘンチックなものと命かけて戦うなんてことはありえねえことなんだ。

なんでもない連絡を聞いて、授業の時間をボーツと待って、いつのまにか授業が終わる。ノートにや多少の板書と、前者に比べてめちやくちやに多い落書き。

今日見ていた夢の中の記憶を頼りに、なんとなく描いているだけで時間はあつという間に過ぎてしまっていた。

：しかしまあトンチキな生き物ばっかいたものだ。

(俺の汚ねえ画力では全くその通りに描けた訳じゃあねえが) 白いヘビのゆるキャラみたいな何か、サメの頭をした人間、髑髏がいくつも連なったクリーチャー……

まあ側から見れば、小学生が思いつきそうなものばかりだ。これ以外にもたぐさんの

顔のいい女たちがいた気がするんだけど…俺の絵でそれを描いちや、落差が酷すぎて気持ち悪くなりそうだ。全員が100人中100人の俺が「いい」と思えるくらいにはいい顔だった女がそろつていたと思う。

「ハア~~~~~……」

でかいため息が漏れる。もし叶うのなら、嫌な部分だけは除いてあの夢をもう一度見たい。幸せな部分だけを切り取るように、しばらく落書きを描き続けていた。

「ん……?」

落書きの中に思いつけないキャラがいた。それは犬…だろう。いや犬だ。ずんぐりむつくりで、体が丸つこくて、ただ頭からチーンソーが生えているだけの。

それは他の落書きに比べてもかなり鮮明に、リアルに描けているような気がした。そして…何か名前があった…のに思いつけない。漠然な何かが頭を覆う。

きっと何か、夢の中の俺にとっては何となく大事な物だったりしたものなんだろう。ぬいぐるみ? ペット? けどそんなじやあない気がする。

(ぬぬ、う、うぐぐぐがぐ…)

『これ』との関係はなんだっただろう、一体いつ出会ったのだろう、何をしていたのだろう。名前はなんて言うんだろう、考えが溢れて止まらないで頭が裂けそう。

所詮夢中でのことにすぎない——なんて言えないくらいには、喉の奥で突つかか

るような感覚を覚えた。

「んまあ…無駄に気難しいことを考えるのは…いいか」

このままいつまでも出てこない考えをし続けたってどうしようもない気がしたから、一度完璧に思考を断ち切った。こんだけ悩むくらいのことなんだから、きつといつか思いうすだろう。シリアスなことなんて考えてても仕方ねえから、仕方ねえ。

気分を切り替えて次の授業の準備をする。長〜く続いた落書きのおかげで、次が終われば昼の時間だ。

「うげ」

次は歴史。昔の偉そうなやつらがなんか色々とやった、ってことを延々と話し続けるだけの授業だ。全ツ然面白くねえし退屈だし眠てえし…そんな程度のモンだった。かといってフケて何がどうなるわけでもないの、とりあえず参加だけはしよう。

「悪魔より歴史の授業の方が強えよなあ…」

そうして俺は授業開始から7分も意識を保ち続けるという健闘をしたのだった。

「おうデンジ、飯を食うぞ！」

ぼやけた頭を抱えながら屋上へ来た。広々として街もそれなりに見渡せるいい場所であるが、“ここに来る”という手間や、他の人がいるということに謎の居心地づらさ

を感じるような空間でもあって、一番乗りしちまえばそのままゆったりと飯が食える。

けど絶対：絶対、学校に来てる日はパワーがいたりする。もしかして人が来ないのはコイツが屋上にいるって話が広まってからじゃあねえのか？

「…ん？そのパンうまそうじゃのお：ワシに献上しろ！」

「ヤ〜だね〜!!!今日の俺ん昼はこれだけなんだ：この常に品薄商品の『超超超・具沢山ピザパン』！こいつに変わるモンがあるってんなら先にそつちを寄越しな！」

「わかつたわかつた、このさつき拾った形のいい石をやるから、な？」

こいつ相変わらずナメやがって：しかもソレ、俺をぶん殴った時の石じゃねえか？なんでそんな、それなりに持ち歩きにくいサイズのものはまだ持ってたんだ…？

別にここで断り続けてもいい。断固拒否の姿勢を見せ続けてもいい、が——断り続けていたら、コイツは無理やり奪って全部食べやがるし、校内にいるパワーの狂信的なファンに何されるかわかったもんじゃあねえし（今も地味に圧を感じる。ドアの裏にでもいるのか…？）、結局大人しく分け与えるのだ。

なるべくウインナーの乗った部分をかき取ってパワーに食わせる。その様子はまるで動物園のふれあいコーナーだ。

まだ物欲しそうな顔をしていやがるが、これ以上持つていかれると俺の腹がもたないのでパンをかつくらう。それを見たパワーはようやく観念したのか、購買で買ったであ

ろうでかいおにぎりを食べ始めた。

ものの5分も経たずに食べ終わった。パワーは横になり、眠る体勢に入る。アイドル業の疲れが溜まつてるのか、寝息はすぐに聞こえてきた。

：普段ならくだらない話をしたりして時間を潰すものだが、肝心の話し相手はこうだから仕方ない。今日は屋上に吹く風音と寝息を聴きながら、何も考えずにぼーっと時間が経つのを待つのであった。

不意にチャイムが鳴る。既にそれなりの時間が経っていたようだ。：本当に何もしてなかった。寝るわけでもなく、妄想するわけでもなく：

汚いいびきを立てる。パワーを叩き起こして、教室に戻る。午後からは真面目に授業を受けよう、と思い、

「そうだった：あのマスコットのこと、ちったあ考えてりやよかつたなあ：」

本当に時間を無駄に過ごした。少しでもあの時間を使つてれば、この喉のつつかえも取れたはずなのに。

謎に気分を落としたまま、午後の授業を受けた。

当然ながら全く頭には入ってこなかった。

もう学校が終わってしまった。今日はほとんど授業の内容が入ってこなかった。普段はもう少しまともに受けてられてた、はず：

どれもこれもあの夢のせいだ、あれが一生ついて回ってくるんじゃないやねえかってくらいにはモヤモヤと残り続ける。全部忘れて切り替えようとしても、何分も経たないうちにまた考えさるのだ。

パワーは用事があるとかできつきと帰ってしまった。こんな時にこそアイツがいてくれたらちよつとは違つたらうに。

変わり映えのしない帰り道をトボトボと歩いて、階段を登り部屋に向かう。一人の部屋は温かみもなく、静かな空気が全身を包む感じがする。夏の今頃はまだ夕日も出てないが、けれど腹は減つた減つたと主張をしてくている。

(何かコンビニで買つてくるか？…うーん、けどなあ…また出るのもめんどくせえなあ) あいつが帰ってくるのは17時を過ぎてからだから、それまでまともなメシを食おうと思つたら外に出るしかない。まだ小遣いはそれなりにあるが、わざわざ買いに行くのもめんどくささはある。

腹減りと行きたくない気持ちがあぶつかり、結局「我慢」に行き着いた。

(別に特別なこともねえし、家でゆっくり食つた方がいいしな)

自分を納得させるようにそんなことをひとりごちながら、かといって何もしないで待つというのもないので、前に借りたDVDを見ることにした。『ザ・カルテット シャーク』と仰々しいタイトルがついてるそれは、白い服を着た人間がサメを囲って崇

めている珍妙なジャケットをしている。初めにビビツと来て借りてきたものだが、正直こんなモン面白いのか：？と、今になってそんな想いが湧いてきた。借りてきた以上は見るが。

冷蔵庫から麦茶と買い溜めのお菓子をセツティングして、この悪魔みたいな映画に立ち向かう準備を整えた。

『おお…：我が神が降臨なされる！』

『あれこそ人類を救済に導く救世主であるのだ！』

『クソツ、なんとかしてあのサメ狂いと四つ頭サメを止めなきゃなんねえな』

『こんなこともあろうかと、B棟の倉庫に大量のダイナマイトがあつたんで少しかつぱらつてきてたんだ。今こそ使う時…：じゃない？』

『でかしたエリ！：いっちょぶちかましてやるか！』

………。

カルテット、つていうから音楽がすげえ映画なのかと少なからずは思ってた。謎の白衣の人間たちを見ないことにして。しかし現実は無情で、ジャケットの人間たちはやはり『カルト』を示していた。

謎の召喚儀式によって呼び出されるサメは四つの頭だし、なんでそのサメが救世主とか言われているのもよくわからねえし、B棟の倉庫とかいう聞き覚えのない場所からダイ

ナマイトを持ってきたヒロインも訳がわからねえし…

『死ねええええええ！バケモノおおお！』

『あつ、なつ、救世主さまあああああ!!!』

爆散するサメを背に、主人公とヒロインは笑いながら走り出してエンディングに入った。全てがよくわからないまま進んで、理解できないまま終わった映画だった。

…なんだか涙が出てきた。なんでこんなものが世に放たれているんだろうか？俺はこのクソ映画に2時間半も時間を持っていかれたって考えると、虚無が心に訪れる。

止まらない涙をティッシュで抑えていると、ゆつくりと玄関のドアが開いた。

「ただいま…って、なんで泣いてんだよお前」

「ああ…あ、おかえり、アキ」

声の主は早川 はやかわ 明久 あきひさ——この家の主人で、俺の3つ歳上の隣人で、俺の保護者みたいな立ち位置だ。

色々あつてここに居候する形になって3、4ヶ月になる。

今では他人との関係だったアキともそれなりに打ち明けたつもりだ。家事は基本アキがやっているから、飯もアキを待たないと食えないのだ。仕事だからしょうがねえけど。

アキはテレビの画面に表示されていた『ザ・カルテットシャーク』のメニュー画面を見て、何かを察したような表情をした。

「ああ、これか。そんなに感動する映画だったのか？」

「ちげえよ、あんまりクソすぎるもんで涙が勝手に出てきたんだ」

「…なんだそりや。とりあえずメシの準備をするから手伝えよ」

「うーす」

アキが買ってきた袋の中身は豚バラ肉、玉ねぎ、大根、その他諸々…きつと豚と玉ねぎメインに副菜だな。今から楽しみでよだれが出てきそうだ。

アキの料理でまずいことは基本ない。外国のよくわかんねえ料理もめちやくちやうまく仕立てるんだから、その腕前は確かなものだ。

みるみるうちにひとつ、またひとつと出来上がっていく。すきつ腹にいい匂いがまた染みってくる。

白米を茶碗に盛って、アキを待つ。二人揃ってから食べないと行儀が悪いから、つて待つちやあいるけど我慢も流石に続けばキツイ。

そわそわとしているのがアキにも伝わったのか、やれやれと言った調子で、けれど急ぐわけでもなく、ゆっくりと腰を下ろして食卓についた。

「いただきまーいただきまアすー」ゆっくり食え

相変わらずアキの飯はうまくて箸が止まらない。

かきこんでかきこんで、たぶんあと3杯は食べないと満足できないだろう。

ひたすらに食べる俺、テレビを見ながらマイペースで食べるアキ。こうして日常の時間はゆっくりと過ぎていくのだった。

…腹一杯飯も食べて、熱い風呂にも入って、すっかり歯も磨いた。これ以上ない幸せな状態で眠れる予感がある。雑誌だらけの床の足場を見定めながらベッドに飛び込んだ。すると一も二もなく眠気が湧き出てくる。

(ああ…サイコーだなあ…こんな日常送れていいのかよ…)

幸せすぎて、ふとそんなことを思った。別にこれが”普通”であるはずなのに。

(まあ、夢の俺はさんざんだったからな。あれを見てたらそう考えちゃうのも仕方ねえかもしれないねえ)

夢の中の自分を見て、リアルの自分が恵まれているという実感をするのはなかなか奇妙だろう。

けれど仕方ない、ベッドで寝れるだけですげえことなんだから…

うと、うとと次第に意識は深く落ちていき、すぐに辺りは暗くなっていた。

3話 とチエ ー

「あれ……？」

気がつくくと、狭い路地に横たわっていた。

ゆっくりと立ち上がり周りを確認する。辺りは暗く、乱雑にものが捨てられていたり、なんだか信用のならないチラシが貼られてたりする。

：目の前に開け放たれたドアがあった。しかし家の裏口やどこかの部屋になんて繋がってるようではなさそうだ。何も気に留めることはなく、むしろ惹かれるようにドアの奥へ向かっていった。

目が慣れてきたのか、うす暗い中にもはつきりとものが見て取れるようになってきた。なんでもないゴミが主だが、まだ使えそうなバケツ、中心からひび割れたカメラ、変な形をした筒状の物体（3つの葉っぱのようなマーク？がついている）などが散乱している。

そしてたった数歩だけ歩き、その生き物に気づく。

ぱっちりとした目、丸っこいボディ、そして頭からチエンソーが生えている。知っている。俺はこの生き物を、知っている。

「あ」

なぜ忘れていたんだろう。今まで歩んできた事を思えば、忘れられるはずもないのに。

「……………□□□……………」

(……………ああ……………!?)

何かがおかしい、俺は今確かにはつきりと□□□の名前を言ったはずなのに——
まるでその言葉の意味だけが抜け落ちたように、発したそばから「がらんどろ」がやってくる。よくわからない、言葉にしても理解できないが、空虚で何もなくてさみしいもの、という感覚が襲ってくる。

それでも、それでも。なんとか□□□の名前を呼ぼうと試行錯誤した。小さく、大きく、叫び、囁き。

けれど、そのどれも意味をなさず、ただただ無が喉から出ていった。

(なんつ…なんだよ…何だつてんだよっ！おかしいだろが！ たった3文字の…家族の名前を呼ぶだけだつてのに！)

不思議な力がそれを妨げているかのような気もする。

たかが、されど家族の名前を呼ぶことすらできない、そのクソツたれな状況がなんだか悔しくて、涙すら出てきた。まるで子供のようにならずくまって、涙を□□□に見せないようにとじつと座った。

…いつたいていどうして？ 訳がわからない…わからないから、なんでだか涙が出てきてしょうがない。

□□□はそんな俺に近寄ってほおずりをした。数回それを続けると、不意に、

「幸せな”夢”を見ているんだね、デンジ」

「えあ…？」

「今の生活がいいのなら、それでいい。本来なら私たちがみたいなものはいない方がいいからね。キミがいいのなら、このまま私のことは忘れてくれ。…それはそれとして、少し寂しくはあるけど」

「んなつ、ことできるわけねえだろ…！お前を、□□□つ、ええ、忘れる!? だって、俺はお前の…家族、だろうが！」

「ありがとう、デンジ。キミと出会えて、本当に幸せだと私は思う」

「…っ」

「…ああ、暖かい…キミに抱きしめてもらっている時が、私はこの上なく愛を感じる。

…デンジ、”目覚め”はしっかりとね。本当なら私も…このまま忘れられたくはない。だから、いつものように、デンジがすごい事を見せてくれるって期待してるよ」

「オチタツ?!」

体が落下し続けていくような感覚を覚えながら飛び起きた。大量の汗を吸った肌着、ベッドシーツはぐしよぐしよで最高に気持ち悪い。

そして、頬を伝う暖かい液体がある。これは…涙？

(あれ…俺…なんで泣いてんだ…?)

なんで泣いているのか、よくわからない。

(俺…どんな夢…見てたんだろう…)

目覚めが悪いまま朝を迎えてしまった。

そして気だるげなまま登校をして、今日も学校にいるパワーの相手をして、なんとな

寝れねえだけなのはわかる。気分転換がてらに少し覗いてみることにした。

「どうした？もう1時だ…さすがに寝なきや明日が辛いぞ？」

「まあ…ちよつと寝付けなくてよお。この際だし俺も見るぜ、それ」

テレビには上半身と下半身が分断された男の死体が5、6個ほど吊られ、地面に捨てられ、あるいは飾られていた。おそろくさっきの叫び声は、ヒロインか何かの女がこれを見てあげたものだろう。

俺はテレビ真正面に背もたれイスを置いて、リラックスできる体制を作った。反対にアキは立ち上がって、台所で何やらゴソゴソしている。

ほんの数分も経たないうちに、目の前のテーブルには湯気を立てるココアが2人分置かれた。

「あんがと」

「ん」

熱すぎず、すぐにも飲めるちょうどいい温度に調節されたココアは、体の中でじんわりと暖かさを広げていった。とても心地よい。血みどろのspratt映画を見ながら、この上なくリラックスに向かつての体勢が整ってきた。

テレビの場面は変わって、下着だけになった女がハリツケにされている。鉄仮面のデカ男は赤く染まったチェーンソーのスターターを起動させる。

ヴ
ヴ
ン

…妙に耳に張り付くその音は、回転するソーで四肢を切り裂かれていく女の悲鳴と共に、頭の中を飛び回っている。

「…一度見始めちまったからとは思って見ていたが、やっぱこんな時間に見るもんでもねえな…」

アキは渋い顔をしながらそう呟く。いつも映画をレンタルしに行っては微妙な映画ばかり引つ提げてくるアキだが、そういえばスプラッタホラーはあまり見たことがない。何か気分の変化でもあったのだろうか。

「なんでまたこんなモン借りてきたんだ…?」

「そりゃあ…アレだ。一見してクソみたいなものでも、蓋を開けてみれば案外素晴らしなものだったりするんだ。…今回に限ってはハズレだけだな」

「ふーん」

特に面白みもない理由だった。別に大した訳が欲しかったつもりじゃないが、かといつて本当にどうでもいいと「ふーん」で止まっちゃまって困るな…。

冷め切る前に、ココアを一気に腹に注ぎ込んだ。画面の中の男は一人目の女を解体し終わったあと、もう一人の女の方にジリジリとすり寄っていく。

『イヤ、イヤ、イヤアツ！助けて！父さん！母さん！ポチタアアアアアア!!』

ヴイイイイイイイイイイイイイイイ

……………ポチタ?

そりゃあ…その名前は…アレ? そう…確か…

夢で見た犬みてえなマスコットの名前だ。

(なんだそつかあ、そうだ、そうだよ。あいつの名前はポチタだ)

妙に聞き馴染みのある名前だと思つたらそりゃそうだ。夢の中の俺といつも一緒だった、家族みてえな存在だったんだから。

…そんなのの名前を忘れる俺もどうかと思うが、忘れちまつてたんだから仕方ねえ。けど、もう忘れない。ぜってー忘れない。

『ギヤアアア! あつ、がつ、いあああああ!!!』

なんか思い出したら胸がスツとしたな…今なら気持ちよく寝れるかもしれない。今のうちにベッドに入つちまおう。

「まだクライマックスじゃないっぽいけど…いい感じだし、まあ俺寝るわ。おやすみ」

「ああ、おやすみ」

部屋に戻る。

ポカポカした体のまま、腹だけにタオルケットをかけて横になる。予想通りに眠気がすぐにやってきた。

(なーんか色々考えてた気がするけど……まあいいや……今幸せなんだもんなあ……)

全身に熱が巡り、胸の脈がどんどんとゆっくりになり、意識は暗く落ちていく。

そうして完全に眠りに落ちる直前、あの音が遠くで聞こえた気がした——

ヴ
ヴ
ン

4話 いきなりんなことある？

「ありやとりやつしたー」

健全な高校生のデンジくんはもちろん、アルバイトをしてお金を貯めることも欠かさない。とはいえ、『ウチから近い』ってだけの理由で100円ショップにバイトをしにきたのは間違いだったって今は思うけどな……！

「いらつしやつませー、お預かりいたしまーす」

休みなく訪れる客、そのレジ打ちや案内までぜんぶやらなきやいけない。何より嫌なのがまた、クソ客が多く来ることだ。

「…ツチ、汚ねえガキだな」

「…あ？…お会計でーふ」

こんなふうに、ただレジ打ちをしているだけでも、初めて会ったばかりの、名前も好きな女のタイプも知らねえカスが唐突に罵倒してくることもある。

普段なら即殴り倒してやってるところだが…今の俺はバイトだし、黙って耐えるしかない。

「ありがとござつしたー」

ドン、とカウンターに沢山の商品が詰まったカゴが置かれる。こうやってエンドレスに商品の読み取りを続けるだけで時間は過ぎていく……

(糞……糞……糞……マジでイラつくなあガイジがよお……)

今日も糞だった。最近は特に嫌なことばかりが多い気がする。何かすげえ嫌なことが連続しては、ちよろつといいことがあつてまた嫌なことが続く。こんなんじや身がもたないって予感がする。

いい女との出会いでもありやあきつと救いがある。けど俺の身のまわりにいる女といえぱパワーくらいだし……けれどパワーは女として見れねえし……けれどもアイツくらいしか俺みたいなやつと関わつてくれねえし……

(いけねえやめろデンジ！その考えはドツボにハマるぞ！)

けれど考え出したら止まらない。思考はせきとめたうちからどんどん溢れ出てきて、むしろ勢いを増してくる。

(このまま一生女とは付き合えないんじや……)

(老後は寂しく孤独死するだけじゃねえか?)

(周りの付き合ってる奴ら見ては嫉妬するだけの人生になるのかな……)

ヤバい、ネガティブを打ち切れ／消えねえ止まらねえ！

自然と早足になる。すでに外は暗くなつて、車もゴールデンタイムより減つてきたために静かな道路がそこにある。

早く帰って横にならないと…それが面白い漫画かテレビ…アニメもいい…とにかくなんでもいいから別に考えられるような何かをしねえと「痛アッ!」「あうっ!」

あんまり考え事をしすぎていたせい、目の前で歩いていた人に気づかずぶつかってしまった。思いつきり頭と頭がぶつかってヒリヒリする。

「んがぐ…う」

「アタタ…ちよつとキミ、気をつけてね？私も不注意だったとは思うけどさ…」

目の前の人物から発せられたのは高くて綺麗でかわいい女の…声。帽子をかぶつて額を抑えているので顔が見えないが、この分だと相当にできた顔の女だ。

ぶつかつた罪悪感より、目の前のこの人の顔を見てみたいと顔を覗き込む形でかかんだ。

「あつ、あのオ！ケガあしてませんかあ!」

「んん、ああ…大丈夫だよ、大丈夫。互いに大したことなさそうでよかつた」

そう言つて手が額から避けられた。

現れたのは日本人離れた顔立ち、外国人？どこかはわからない。目は暗くてよく見

えないが緑色？サラサラでここまでいい匂いのする髪が特徴的な人だった。

「かわいい…」「えっ？」

つい言葉が漏れてしまった。仕方ない、こんなにも美人な人がいたら100人中100人の俺が思わず言っちゃまうだろう。

「変わってるね、キミ。今度の人とはぶつからないように気をつけるんだぞ〜」

そう言うと、その人は行ってしまった。

かくいう俺は、その人に対して何か呼び止められたわけでもなく、口でどもってそのまま言葉は出なかった。

「…かあ〜！あんな美人と付き合えたら、俺ん人生もちったあ楽しくなるだろうによお…」

帰宅道、風呂、飯、寝床で、彼女の香り、声、顔を思い出しながら、あんなことやこんなことを考えながらその日を終わらせた。

(しかしまあ、昨日の出会いがすげえ神ってただけで…)

「おうデンジ！奇遇じゃな！」

目の前にいるのは残念代表、パワー。顔以外全てがダメなせいで、俺は異性としてコイツを見れたことがない。

今日は休日だからとあてもなく散歩していたらこれだ。あわよくばあの人と会えるなんて思った俺は馬鹿だったのかもしれない。代わりがこれなんて誰も思ってた。なかった。

「つーかよお、お前最近フツーに見過ぎじゃねえ!? アイドル業クビになったんですかア!?!?」

「バカデンジが！毎年毎月毎じゅつ…毎日毎時毎分毎秒ワシがテレビ撮影でもしてると思ってたかアホめ！」

「噛んだな、今噛んだなテメー！俺は聞き逃してねえからな！」

「は？噛んでないが？」

そのまま街の真ん中でじゃれあいになる。なんだかんだでこいつといる時間は楽しいものだ。

バカでアホで虚言癖でナルシストで差別主義者だけど、気は合うし、それなりに…それなりに話は通じるし。

「それはそれとしてよ、お前ネコ置いて外出ていいのかよ？今日相当暑くなるって言ってたぜ？」

「ん？ニヤーコのことならもう外に出ておる。今頃ナワバリでも覗きに行つとるんじゃないかの」

「飼い猫でボス猫かよ、たまげるな」

「それはそれとしてそれとして…デンジよ、実はウヌに用があつたんじゃ。ここで出会えたのは本当に奇遇じゃな！」

俺に用々？ぜつてえろくなことじゃねえぜコイツの用は…。いつだかの記憶で、コイツに用があると頼まれたファンのクラスメイトは、四つん這いで椅子の真似をさせられていた。

あんまりにも王様ムーブをナチユラルにやつてのけるパワーも怖えし、それをサラツとやつてのける椅子役のやつも怖かった。人が椅子になるなんて情けなくてしようがねえだろ普通は。

「で、なんだつてんだよ用つて。メシおごれつてんなら聞かねえからな！」

「違う違う、元よりウヌに金の頼りなんかしないと決めておるわ。それで用と言うのはな…」

パワーは言葉を溜めて、まるで歌舞伎のように大見得のポーズを取ると、

「デンジ、ワシと一緒にテレビに出ないか!？」

「ハア~~~~~??？」

どうやら相当ヤバいことになりそうな予感がする。

5話 非常識なヤツ〜！！

「というわけでよお、俺テレビに出ることになったわ」

「は？」

アキは困惑したように（というかしてる）、俺の方をぼかんと見ている。しようがない、いきなり言われてすぐ理解できる方がどうかしてるだろう。

「そのー…なんだ、パワーっていうと？今人気のアイドルだよな…なんでお前と知り合いないんだってのもあるけど…ああもう、なんで先に俺に話をしなかったんだよ！」

「いやあ、だってよお…」

「いいか、仮にも俺はお前の保護者、親代わりなんだよ。色々あつたが——まあ今この話をしても仕方ないが…」

コワ…結構頭にキチャってるよ…眉間にシワがよりまくってる…。確かにまあ、説明もしねえでいきなり受けちゃったのはまずかったよな…。

「まったく…だって、じゃないんだぞ。それとも何か？ちゃんとした理由があるのか？聞きはしてやる」

理由：理由：…今のアキに説明するのにアバウトなのじゃあダメだ、下手したら約束は
 パアで、俺はパワーとの約束を破ることになっちまう。

それはダメだ、それだけはダメだ。パワーのためにも俺のためにも。あの時の会話を
 思い出して、どうにか説得できるようにしてみなくては――

そう、確かあの時：

『普通、他のちゃんとしたタレントやら呼ぶもんだと思われるが、今回の番組の内容が”
 身近な人とロケをして、自然な反応を撮る”ってことになつとるんじや。学校の奴隷達
 を連れて行つてもつまらんからのお：デンジ、どうじや？とりあえず話だけでも聞いて
 見ないか？』

『え〜〜〜〜…普通にヤダよ……テレビに出てすぐ人気者になれるわけじやあ
 ねえし：俺ただの晒しモンになるだけだし：めちやくちや緊張するし…』

『そんなこと気にするな！そこら辺はリメイクしていいのが撮れるまで頑張るし、編集
 でなんとかしてくれるじやろ！だから、な！』

『うーん：けどさあ、やばくなりそうなのに対して俺側にウマ味がねえだろウマ味が。
 なんかねえのかよ』

『ふむ、その番組はロケ形式じゃから：飯代を向こうで出してくれるから、タダでうまい

ものを食べられるかもしれんぞ。ワシが口を聞いてやるから、いくらでも買える食べれるって算段じゃ。魅力的じゃろ?」

『…ぬぐ…う…いや…しません! それじゃしません! 明らかに釣り合っただろって!』

『面倒くさいヤツじやお…そしたら…お、そういえば…ふむ…』

『…ワシの知り合いのアイドルと一日デートできるようになかけあつてやる、と言ったらどうする?』

『しまアす!』

「放つとけなかつたんだよ! ダチが困つてたんだからよお!!」

「…気持ちわかるが…はあ…」

そう、俺の大切な友達、いや親友、ベストフレンドが困つてたんだ。そりやあ助けないわけにはいかない。

アキは頭を抑えて、一語一語を考えながら搾り出している。

「まあ…とにかく…事務所の方とテレビ局の方と、色々話を聞いてからだな。あんまりお前のためにならないようなことだったら断らさせてもらうだけだ。…いいな?」

「ええ〜〜」

「返事」

「はいー」

「よし。今度そのパワーちゃんに会ったら、とりあえず俺に会うように話しといてくれ。そこから先方に話を通していくからな」

ひとまずアキとは話をつけられたようだ。…まあ、問題が先送りになったってえだけのことだけ。

しかしパワーとアキを対面させてもよいものだろうか、とは思う。真面目なアキと——というかパワーが異常すぎて大抵の人間とは合わない——あのトンチンカンの爆弾なんて居合わせたらどうなる…？

……まあ全部その時に考えるか！

(とりまメール打つとくか…もうケータイも慣れたモンだな)

ケータイを持たされてから2ヶ月くらい経つが、手が最適化されてついているのがわかる。頭の中で浮かべた文もすぐ打てるようになってきたから、成長してるってことなんだろう。

(『ウチの親みたいなのに説明しなきゃいけないから、今度ウチに来てくれ。なる早がいな』つと…)

これで大丈夫だろう。見てなくても学校で会って話せばいい話だ。もう22時から

ピンポン

「それに配達にしては遅いし…なんなんだろうな？つか誰だ？ちよつと不気味だな」
「結局わからないか…今行きます！」

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン

「うるっ」「さあっ!？」

「ああもう、誰だこんな時間に、しかもピンポン連打までしやがって！出方次第じゃタダじゃおかねえぞ！」

アキはドストロスと音を立てながら玄関に向かう。俺もアキも心当たりがなくてわけがわかんねえって感じだけど、少なくとも扉の奥のヤツはまともじゃなさそうだ。

…：…なんだか嫌な予感がした。扉の先に大量殺人鬼がいるなんて訳じゃあねえとわかってはいるが、それでもなぜか、なんだか背筋に異物感を感じてならなかった。もしかして、もしかしてだが、

「なあアキ、ちよつと——」

「オイ！今何時だと思ってるんだ！一体何の用で——」

アキが勢いよく扉を開けて怒鳴り散らかす。なんとというか思ってた通りというか、そこにいたのは、

「うるっさいのお……こんな時間に叫んだら近所迷惑じやろうが！ちったあ考えんかアホめ！」

メールを打ってから30分も経ってないのに、しかも夜中なのに、更には俺の家なんて教えた事ないはずなのに、パワーがそこには立っていた。

6話 印象最悪の邂逅

「……………で、メールが来たし暇だったから、今この時間に来たって事か」

「おう」

「……………」

「あ、アキ……」

やべえよ……アキの奴、眉間のシワがこれ以上ないくらい寄ってるよ……。こうなったら相手がどうか気にしねえだろうな……。

流石にこのままだとパワーがメタクソに言われる未来が確定してしまうので、助け舟を出すことにした。

「わりいアキ、悪いのはこの時間に来たパワーじゃなくて、時間決めてなかった俺だよ」
「時間を決めてなくても普通こんな時間には来ねえよ」

クソ、ぐうの音も出ねえ正論だ。パワーとアキは夜のこんな時間に”暇だから”で許されるような関係でもないし、単に非常識すぎてどんなフォロワーもできないのがどうしようもない。

当人はそれが当たり前のように人の干し芋を食いまくってる。あまりに馴染みすぎて、元からこの家の住人だったようだ。

でかいため息をついたアキは、一語一語をゆっくり選びながら、

「なあ…パワーちゃん、君がこの時間に来たのはこの際いいとして、デンジがテレビに出るってことで色々と話がしたいんだけど、いいか？」

「あ〜？ワシはもう眠たいんじゃないかのお、また今度じゃダメか？」

「……………」

「落ち着けアキ！ちよ…バカ！」

今にも掴みかからんとするアキを羽交い締めにする。ダメだ、徹底的にウマが合わねえぞこいつら！

いやウマが合うどうこうってかパワーがやばすぎるだけで、なんも相性がどうこうって話でもないんだけど…。

「パワー…アキはっ、俺がテレビ出るってことで、なんかっ、お前の上司の人とかに話聞きてえんだってよ…っ」

「なんじゃ、そんなことか。……そんなことなら別に今呼び出さなくてもよかつたんじゃないかの？マネも寝てるとは言わんが、そろそろ帰る時間じゃろうし」

「テメーがっ…勝手に…来たんだろうがよお！」

「その言い草はなんじゃ？アレか？ウヌは王様か？ワシを呼びつけた挙句に勝手に来た
とほざくその頭はどうなっておるんじゃ？」

「よしアキイ！一緒にこいつに常識って奴あわからせてやろうぜえ！」

アキの拘束を解いた。パワーはいつもこんな感じ：いやちよつとひどいか？それにしても普段に増してイラついてきた。家だからか？今はどうでもいいけど。

こいつのヤキに俺も加勢しようとする、アキは大きく息を吐いてゆつくりと腰を下ろした。

「もうわかった：そういう人間だつてことがな。まともに取り合つただけ疲れるだけだ。俺の伝えたいことだけをお前に伝えるから、伝えたことだけをやれ、いいな？」

「…初めて会う人間に対して態度がなつたらんのお：その気になればこの家にワシのフアンを送りつけることも可能なんじゃが？この家主にいじめられたとでも言うか？」

「コワ〜…」

俺の知ってるパワーとアキじゃない：時間とタイミングが悪すぎたにしても、ここまで険悪なムードになるもんかよ：なんだか少し居心地が悪い。

いたたまれない気持ちでいると、アキはパワーの脅しをなんでもないかのように、

「お前がが言った通りに俺はこの家主だ。だから俺はお前に対して警察を呼ぶこと

だってできる。『非常識な時間に押しかけてきた挙句暴言を吐いてきた』とでも言うか？ 現役アイドルがなんて不祥事起こしたらどうなるんだろうな」

「ぐぬ…なんだかワシが悪くなりそうな予感がする…」

「いや、たぶん10:0くらいでお前が悪いぞ」

こればかりはどうもパワーをフオローできる気がしない。下手すりゃこのまま絶交しろとまで言われそうなくらい最悪のコンタクトを果たしてしまったが、ここからどうしてテレビの話にもち込もうか…？

「俺からは2つだ。お前の上司…マネージャー？ テレビ局のプロデューサー？ この場合はわからんが、とにかくお前より偉い人と俺と話をする場を設けること。デンジがどんなことをするのかって話をまとめなきや、俺から許可はできない。…そして俺の言うことは素直に聞くことだ。下手な反抗も、何もしないでな」

アキはすごい威圧感を放ちながらパワーに言った。当然そんな言い方でパワーがそんなり言うことを聞くわけもなく…

「1個目はまあ、聞いてやる。元々デンジに、ワシがいきなり言っただけの話じゃからな。それはそれとして2個目はなんじゃ？ なんの得もないのになんでウヌの話なんぞ聞かなきゃならんのじゃバカ！」

「…デンジ」

「んお?」

「撮るぞ、はいチーズ」

「お?うえーい」

パシャ、とケータイのカメラ音が鳴る。アキがいきなり写メを撮った理由はわからなかったが、すぐにその意味はわかるようになる。

「わかるか? お前と同じくらいの歳の男とツーショットで写ってる。この意味がわからないわけじゃないだろ、売れっ子アイドル」

「……いつかそのうち泣かせてやるからな! 気持ち悪い髪をしょってこのチョンマゲが!」

「黙れ、話は終わりだ。お前は言われた通りのことをやれ」

す、すげえ……今の行動だけでパワーを完全に封じ込めた。あの写真がなんらかの形でもメディアに流されたら、パワーのアイドル活動に支障が出るのは間違いないだろう。ついでに写ってる俺もヤバイのはわかかって……アレ、俺もヤバくないか?

パワーは捨て台詞を吐いて、ドアを力任せに閉めて帰っていった。台風のように来襲して、帰った後はおそろしく静かな部屋がそこにはあった。

少しの間そんな無音が続いて、アキが不意に大きくまたため息をついた。

「……いや、ごめんな? アキ。いつもあれほどイカれては——いやいつも……うーん……」

「なんでもいい…もうあんなのと関わるのは勘弁してえな…してえが…あんなのでもお前の友達なんでもんな…」

「え？…ああ、そーだな」

なんだかんだ言つて、アキは俺とパワーの關係のことを氣遣つてくれてたらしい（その上であんなにキレてたんだから、まともな人間とパワーを鉢合わせたら誰でもあんなるんだろう）。

本当にできた人間だ、アキは。

「とりあえず約束は約束だ、どんなものであれやり遂げてこい…と言つてやりたいが、相手方があいつと同じくらいイカれてたら絶対に出させねえ。それだけはいいな？」

「おお、全然いいぜそれくらいは」

「…つと、もうこんな時間か。デンジ、もう寝とけ」

「へえい、つと」

あんな空気の場所にいたからか、なんだかすぐ疲れた気がする。今日はすぐ寝れそうだから、代わりに嫌々な夢でも見そうな感じだな…。

芋を食べたから歯を念入りに磨いて、ベッドにゆつくりと横になる。

なんだか今日もすげえ一日だったなあ…。

「……」

チツ、とライターには火が灯る。火はアキの口に啞えられたタバコにゆつくりと近づいて、その葉を燃やす。勢いよく精神安定剤ニコチンを吸い込み、辺りにはその副産物たる煙が充満していく。

(…糞つたれ…余計なストレス抱えちまった…)

思い出してイラつきつつも、タバコを吸うたびに頭はクールになっていく。そうして一本目が吸い終わる頃には、完全に気分は落ち着いていた。

(いつものことだ…こんなんでも胃を痛めてもしょうがねえな)

そこまで思つて、ふと気づく。

(…いつも…いつも…何だ?)

インパクトが強すぎて頭が混乱してるんだと結論づけて、寝る支度をすることにした。

窓から見える月はいつもより明るくて、そしてとても薄い三日月だった。